

レビ記22章「聖別された食物」

1A 食べてはならない人々 1-16

1B 汚れある祭司 1-9

2B 一般の者 10-16

2A 献げられないいけにえ 17-33

1B 欠陥のある動物 17-25

2B 子と母 26-33

本文

レビ記 22 章を開いてください。私たちは、21 章と 22 章で、祭司たちが聖なる所で奉仕をする時の規定を読んでいます。

21 章では、祭司自身が聖なる者となっているので、葬儀や婚礼ではいけないことが書かれていました。親族や家族で死んだ人について、当然なら吊いの時に、遺体に触れるのですが、それさえもしてはいけないと定められていました。祭司は親族に触れてはならず、大祭司に至っては近親でも、父母でも触れてはいけません。それは、死というものが、罪から来ていることを意味していたからです。それから、婚姻についても、規定がありました。祭司について、淫行を犯した女や離婚をした女には触れてはいけません。大祭司については、やもめであってはいけない、処女だけを妻とすることが規定されていました。夫婦は一体となるのであり、他にない親密な交わりがあるからです。

それから、葬儀についてですが、もう一つ、周囲の異邦人の風習では、死者の霊に仕えるものが多かったのですが、それを避けるための規定もありました。身に傷をつけてはならないというものなどです。死者の霊についてのことも、また婚礼についても、交わることに深く関わります。祭司というのは、仲介者であり、神のことを人に示します。また人のことを神の前で執り成します。仲立ちをします。けれども、自分自身は神ご自身のものであり、神との交わりの中に入って来るようなことはあってはならないのです。新約聖書では、不信者と信者の交わりはありえないことを教えています。不信者の人々と共にいるということに召されています。けれども、不信者とその価値観を共有することはできない、ということです。世に神を証しするために遣わされていますが、世に属しているのではないのです。こういったことを学びました。

22 章は、今度は、祭司たちが食べるものも、聖なるものでなければならないことについて見て行きます。祭司自身だけでなく、祭司が聖なる所で食べる対象も、聖別されていなければいけません。主は、祭司だけでなく、そこで献げられているものも聖なるものとしておられます。

1A 食べてはならない人々 1-16

1B 汚れある祭司 1-9

¹ 主はモーセにこう告げられた。²「アロンとその子らに告げよ。イスラエルの子らの聖なるものは慎重に扱え。わたしの聖なる名を汚してはならない。それは彼らがわたしのために聖別したものである。わたしは主である。

「イスラエルの子らの聖なるもの」とは、彼らが祭壇における、火によるいけにえや、穀物のささげ物などです。彼らは、自分の所有している牛や羊、そして作物などを、主のためだけに用いられるように、他の家畜や穀物と別ち、それで献げています。それらのものを取り扱う時に、ぞんざいにするならば、主の聖なる名を汚すことになるということです。

つまり、自分自身が主に献げて、自分を聖く保つだけではなく、他者が聖別して持ってきているものをぞんざいに取り扱ってはいけない、ということです。自分自身のことだけでなく、他者のことも省みるということです。聖書では、互いに仕え合いなさいと教えています。そして互いに愛し合いなさいと教えられています。自分の信仰は良いのですが、自分自身の信仰だけを考えて、他者の信仰のことを、主から来たものとして、つまり聖いものとして、尊ぶのです。

イエス様が、そのような方でした。他の人々は、何でもないこととして、ぞんざいに接していた人々を、主はその人々にある信仰を見て、それを尊び、称賛されました。長血をわずらう女に対して、着物のすそにさえ触れば、癒されると信じて近づいたのですが、それを癒やし、清められただけでなく、彼女の信仰が救ったのだということを宣言されました。取税人ザアカイが桑の木に登って、イエス様を見ていたら、彼の家に行くことになっていると言われて、そこでザアカイが悔い改めていました。それで、救いがこの家に来たと宣言されました。また、貧しいやもめの献金については、どうでしょうか？非常に少ない額でしたが、彼女の生活費の全てを献げたので、他の人々よりも多くを献げたとされたのです。このように、神から来た、信仰による行いを聖なるものとみなし、それを尊ばれました。

³ 彼らに言え。代々にわたり、あなたがたの子孫のだれかが、イスラエルの子らが主に対して聖別した聖なるものに、汚れたままで近づくなら、その人はわたしの前から断ち切られる。わたしは主である。

祭司たちが、汚れていることがあります。儀式的に、象徴的に汚れていることです。ここで大事なのは、汚れるのは仕方がないけれども、そのままの状態、先ほど話した、イスラエル人が聖別したものに近づいたら、主の前から断ち切られるのです。

⁴ アロンの子孫のうち、ツアラアトに冒された者、または漏出のある者はみな、きよくなるまで聖なる

ものを食べてはならない。また汚れている者、精を漏らす者、⁵あるいはすべて人を汚す群がるものに触れる者、または、いかなる汚れであれ人を汚れさせる人間に触れる者もそうである。

これらはすでに、清いものと汚れたものの区別の教えの中にありました。祭司が、ツアラアト、らい病の患者の患部を見るように命じられていましたが、祭司自身がツアラアトに冒されることもあります。そして、漏出もそうですし、祭司だからといって汚れないというわけではなく、一般のイスラエルの子らと同じようになることがあります。そうした状態で近づいてはならないのです。

私たちは、主に仕えている者をそのまま、無条件でその人は聖いとみなしがちです。けれども、その仕えている者たちが、一般の神を敬っていない人々と同じように汚れを心に抱いたり、行いにおいて汚れることがあるのです。これらから、清められなければ、主に仕えている者が聖なる名を汚してしまうこととなります。

⁶これに触れた者は夕方まで汚れる。その人は、からだに水を浴びずに聖なるものを食べてはならない。⁷しかし、日が沈めば彼はきよくなり、その後で、聖なるものを食べるのが許される。それは彼の食物だからである。

群がるものに触れても、その一日が終われば、清めへの道が開かれます。夕暮れになれば、水を浴びればきよくなります。これは、主の清めが日ごとにあるということの証しです。私たちが、日ごとに主の前に出て行って、清めていただく必要があります。

⁸死んだ動物や野獣にかみ裂かれたものを食べて汚れてはならない。わたしは主である。⁹彼らがわたしへの務めを果たすなら、彼らが聖なるものを冒し、そのために罪責を負って死ぬようなことはない。わたしは彼らを聖別する主である。

死んだ動物やかみ裂かれたものなどは、決して食べてはいけません。死に近づくことに、主は避けるように強く命じられていますね。ましてや、食べるとなれば、それは罪責となります。日ごとに清められることを求める時には清められますが、罪の中に生きているのであれば、私たちは自分自身を滅ぼしてしまいます。

2B 一般の者 10-16

¹⁰一般の者はだれも、聖なるものを食べてはならない。祭司の居留者や雇い人は、聖なるものを食べてはならない。

一般の人は、聖なるものとされたものを食べることはできません。聖別された祭司のみが食べることができます。それは、イエス様のからだを血を覚えて、それを食べる、飲むということをする聖

餐式のことを思えば、理解できると思います。聖なる者とされたからこそ、それにあずかることができるのであり、罪の中にいて食べることはできません。

同じように、主に献げられていることを、未信者の人たちが関わることはできません。あるいは、世にあるものが、主への礼拝や奉仕の中に混ぜ合わせることはできません。例えば、世にある音楽を、人々を集めることができるからという理由で、教会に取り入れることはできるでしょうか？できませんね。一般のものが、聖なるものに混ざることがあってはならないのです。

そして、それがたとえ、祭司のところの居留者や雇い人であっても食べることはできません。近くに物理的にいるからといって、聖なるものにあずかることはできないのです。私たちのそばにいる人々が、信仰を持っていないのに、信仰を持っているかのようにふるまうことはできないのです。

¹¹ しかし、祭司に金で買われた者はこれを食べるのが許される。また、その家で生まれた者も祭司のパンを食べることが許される。

これは、奴隷のことです。金で買われています。したがって、その祭司の家のものとなっています。だから、食べることはできるのです。奴隷の子として生まれても同じです。これが分かるのは、主によって贖われて、主のものにされている者たち、僕とされている者たちが、主の家にあるものにあずかることができるようになったのと同じです。キリストの対価によって、この方のものになることができるから、キリストにあるものを受け取ることができるのです。

¹² 祭司の娘は、一般の者と結婚したなら、聖なる奉納物を食べてはならない。¹³ 祭司の娘が、やめあるいは離縁された者となり、子もなく、娘のときのように再びその父の家に戻っているなら、父の食物を食べることが許される。しかし、一般の者はだれもそれを食べてはならない。

これは、どの家にいるのか？ということが問われていることです。たとえ血縁関係があっても、他の家に嫁いでいるのであれば、その家の者になっています。私たちもどの家にいるのか？が問われています。神の家にいるのであれば、聖なるものにあずかることができます。御霊によって新たに生まれて、神の家族になっているのかが問われています。

¹⁴ だれかが誤って聖なるものを食べるなら、それにその五分之一を加えて、その聖なるものを祭司に渡す。¹⁵ イスラエルの子らに、主に献げる聖なるものを冒し、¹⁶ 聖なるものを食べて、その罪過の咎を負わせてはならない。わたしは彼らを聖別する主だからである。」

誤って食べてしまったら、五分之一を加えて償います。盗んだ時と同じように考えて、その損失を補うのです。

こうして、聖なるものは祭司のみが食べるように、主が命じておられるのですが、聖なるパンについて興味深い話が聖書にあります。ダビデがサウルから逃げた時に、彼はパンを分け与えてくれないかと祭司に頼んでいます。けれども祭司の手元には、聖所に供えられたパンしかありませんでした。けれども、緊急の状況の中で祭司は彼にパンを分け与えたのです(1サムエル 21:6)。この出来事をイエス様が、パリサイ人に対して語られました。弟子たちが安息日に空腹になって、麦畑の穂を摘んで食べたことをパリサイ人が咎めたからです。イエス様は、ダビデが祭司から聖なるパンをもらったけれども、それは「憐れみ」の行為であり、憐れみのほうがいけにえにまさる、と言われました(マタイ 12:7)。

したがって、私たちは「交わり」ということにおいて、気を付けなければいけません。確かに罪であるとか、信仰を持っていないのに聖餐のパンを取ってしまったとか、教会において誤ったことを行ってしまう人がいます。そのことを「大丈夫だ」と言って軽視しては決していけないのですが、同時に、杓子定規に、厳格に適用してはいけない時があります。それは「憐れみ」という神の大切なご性質を鑑みるときです。私たちが献げていることよりも、神の憐れみが優っていることを覚えておかなければいけません。

2A 献げられないいけにえ 17-33

1B 欠陥のある動物 17-25

¹⁷ 主はモーセにこう告げられた。¹⁸「アロンとその子ら、またすべてのイスラエルの子らに告げよ。だれでも、イスラエルの家の子、またはイスラエルにいる寄留者がささげ物を献げ、誓願のささげ物あるいは進んで献げるものとして、全焼のささげ物を主に献げる場合、¹⁹ あなたがたが受け入れられるには、それは牛、羊、あるいはやぎのうち、傷のない雄でなければならない。²⁰ 欠陥のあるものは、どのようなものでも献げてはならない。あなたがたの代わりにそれが受け入れられることはないからである。

火によるいけにえで、イスラエルの人たちがささげ物を献げる時に、自ら進んで献げるもの、誓願を立てるものがあります。通常に献げる物に加えて、献げています。そして全焼のいけにえとして献げる時、それが、傷のないものでないといけないとのことです。欠陥があってはいけません。これはまさしく、私たちの主イエス・キリストを指し示しています。「I ペテ 1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

²¹ また、人が特別の誓願を果たすため、あるいは進んで献げるものとして、牛か羊の中から交わりのいけにえを主に献げるときは、それが受け入れられるためには傷のないものでなければならない。それにはどのような欠陥もあってはならない。²² 盲目のもの、折れたところのあるもの、傷のあるもの、あるいは、うみの出るもの、湿疹のあるもの、かさぶたのあるもの、あなたがたはこれら

のものを、主に献げてはならない。また、これらのものを主への食物のささげ物として祭壇の上に献げてはならない。

誓願のささげ物で、交わりのいけにえについては、脂身や腎臓の部分など祭壇で焼きますが、肉は祭司が受け取ります。そのいけにえが、傷があつてはいけません。かなり、詳しく記されていますね。交わりのいけにえは、主が受け取るだけでなく、自分たちも食べるので、全焼のいけにえよりも、さらに詳細に、完全な姿が試されているのかもしれませんが。

²³ 牛や羊で、足が伸びすぎているか、または萎え縮んだものは、進んで献げるものとすることはできるが、誓願のささげ物としては受け入れられない。²⁴ あなたがたは、辜丸の押しつぶされたもの、砕けたもの、裂かれたもの、切り取られたものを主に献げてはならない。あなたがたの地でそのようなことをしてはならない。

傷のないだけでなく、欠陥のあるものもいけません。「あなたがたの地でそのようなことをしてはならない。」と教えているのは、おそらく、異邦人は異教の中で、欠陥のあるものや、裂かれたもの、切り取られたものも、すべてを献げていたのでしょう。不完全なものを献げて、彼らは構わないのとはします。

しかし、私たちは主の聖なることを示さないといけません。私たちの努力で、救われるのではありません。全き者でなければ、受け入れられないのです。しかし、信仰によって、キリストという全き方によって、初めて私たちは受け入れられます。

²⁵ また、あなたがたは、異国人の手から何かこのようなものを受けて、あなたがたの神のパンとして献げてはならない。これらのものは損なわれていて欠陥があるから、あなたがたは受け入れられない。」

イスラエル人の間では、傷のないもの、欠陥のないものは注意しているかもしれませんが、異邦人は違うので、それを受け入れてしまう過ちを犯しがちです。私たちも、一般の信仰を持っていない人々の意見を聞いて、自分たちの努力や今の姿で受け入れられるのだよ、という教えや行為に影響されてはいけません。

2B 子と母 26-33

²⁶ 主はモーセにこう告げられた。²⁷「牛か羊かやぎが生まれたときは、七日間、その母親のもとに置いておく。八日目以後、それは主への食物のささげ物として受け入れられる。²⁸ しかし、牛でも羊でも、それをその子と同じ日に屠ってはならない。

主は、いけにえとして屠られる動物に対して、憐れみを示しておられます。一歳の子羊をささげなさい、という戒めがありますが、七日間は母親にとどめておくということ。そして、母と同じ日に屠ってはならない、ということです。動物虐待をする人は、人への危害に発展するということを聞いたことがあります。命に対する尊厳は、人のみならず動物にも、神は与えておられます。

²⁹ 主に感謝のいけにえを献げるときは、あなたがたが受け入れられるように、それを献げなければならない。³⁰ その同じ日にこれを食べ、朝までそれを残しておいてはならない。わたしは主である。

感謝のいけにえについての戒めは、すでに出ていました。神への感謝は日毎に新しくなっていなければいけません。日々、絶えず私たちは主に感謝をささげます。

³¹ あなたがたはわたしの命令を守り、これを行わなければならない。わたしは主である。³² わたしの聖なる名を汚してはならない。イスラエルの子らの間で、わたしは聖であることが示されなければならない。わたしはあなたがたを聖別する主である。³³ わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した。わたしは主である。」

これまでの命令の繰り返しです。なぜ、行わないといけないのか？それは、この方が主だからです。何か私たちに得になるから命令に従うのではなく、主が言われているからという理由だけで従います。

そして、聖なる名を汚さないようにするためです。イスラエルと同じように、私たちも、イエス様の聖なる名が汚されていないかどうか、注意深くあるべきです。そして、主はイスラエルを聖別しました。その前に、エジプトから贖い出されました。同じように、私たちは世から贖い出され、聖なる御霊によって聖められ、神のものになりました。

私たちの生活が、主に喜ばれるのには、自分自身を献げることもそうですが、自分の生活の周り全般に清められているか？調べてみましょう。自分の財産はどうか？自分の献げている時間や趣味や、周りの交友関係はどうか？そして、教会での兄弟姉妹を尊び、愛している関係の中にあるのかどうか？自分自身だけでなく、自分の周りにあるもの、また周りの方々が主から来ているものとして尊んでいるか、敬っているかを考えます。